「お寺 MEETING」で公開対談

金子　昭

大阪市天王寺区の浄土宗應典院(秋田光彦代表)で1月18日、「お寺 MEETING」と題した座談会が開催された。「なぜ宗教者がホームレス支援なのか―信仰と社会との狭間で」のテーマの下、浄土宗光照院副住職の吉水岳彦(がくげん)氏と共に公開対談を行った。

吉水氏は東京で路上生活者を支援する「社会慈業委員会（ひとさじの会)」事務局長を務めている。32歳という若さの僧侶であるが、宗教的人格がにじみでた清々しい姿とその語りに強い印象を受けた。社会活動について考え、自ら取り組んでいる僧侶や宗教研究者など約30名が参加し、活発な質疑応答が行われた。

吉水氏は、ホームレスの葬送支援から活動を始め、自坊に共同墓「結の墓」を建立。これを契機として浄土宗僧侶の有志とともに、平成21年4月、ひとさじの会を発足させた。月2回、浅草駅周辺で炊き出しでおにぎりや医薬品などを配布したり、夜間パトロールや生活相談を続けている。

宗教の社会貢献という場合、超宗派・超宗教での活動が昨今注目されているが、吉水氏はあえて一宗による活動を強調する。ただし、その場合の「宗」とは、特定宗派・団体というよりは、その人の価値判断や行動規範の源泉となる教えに力点が置かれた概念である。私はその深められた概念に同意するものの、超宗派・超宗教のメリットは、むしろ被支援者の側に立っての発想であることを述べた。つまり、そのような形を取ることによって、布教が目的でなく、純粋な社会活動であることを明確に示すことができるからである。

公開対談の様子（應典院提供）

会場となった應典院は社会に開かれた寺院として、さまざまなイベントや活動を展開している。座談会のモデレーターを務めた秋田代表は、今後も社会との関わりの中で現代仏教を問い続けたいと抱負を語った。

第233回研究報告会（12月24日）
『知ある無知』の争点とそのコンテクスト
―J. ヴェンクのクザーヌス批判を中心に―

人間学部准教授　島田勝巳

本発表では、ニコラウス・クザーヌス（1401-64）の主著『知ある無知』(*De docta ignorantia*, 1440）に対する批判として知られるヨハネス・ヴェンク（c. 1390-1460）の『無知の書物について』(*De ignota litteratura*, c. 1442-43）と、それに対するクザーヌスからの反論の書『知ある無知の弁明』(*Apologia doctae ignorantiae*, 1449）を取り上げ、両者の争点とその背景について検討した。

J. ヴェンクはハイデルベルク大学で神学教授を務めたドイツ人で、神学的にはベギン派とエックハルトを異端視する一方、哲学的にはトミズムとその背後にあるアリストテレス哲学の擁護者を自認していた。彼のクザーヌス批判の書『無知の書物について』は、『知ある無知』に対する10の命題とその補足、及びそれらに対する批判からなる。本発表ではそれらを認識の問題と神の問題とに大別し、ヴェンク、クザーヌス両者の見解とその背景について考察を加えた。

まず認識の問題では、事物（res）の真理・何性（quidditas）をめぐる理解を両者の争点として挙げることができる。知性認識は類似によって事物の何性に到達し得ないとするクザーヌスに対し、トマスの「存在の類比」(analogia entis）に依拠するヴェンクは、知性が像と類似によって認識し得るものとして捉える。さらにヴェンクは、クザーヌスの「対立の一致」の教説が神と被造物との一致を許容するものと捉え、それが矛盾律の破壊に、延いてはアリストテレスの教説全体の破壊に繋がるものとして批判する。これに対しクザーヌスは、まず、真理が類似によっては到達され得ない理由として、「存在の類比」の議論が前提とするような「比」(proportio) が、無限なるもの（＝神）と有限なるもの（＝被造物）との間には成立し得ないという点を強調する。さらに、「対立の一致」の教説が神と被造物との一致を論じるものではなく、知性をも超えた神（＝絶対的真理）における論理であるとして自己弁護を図っている。

次に神の問題としては、「運動」をめぐる議論が争点として浮上する。ヴェンクは、「包含」(complicatio）と「展開」(explicatio）という独自の枠組みで運動を説明するクザーヌスの議論がアリストテレスの「第一動者」の観念を破壊し、それによってトマス的な神の存在証明も無効化してしまう可能性を看取する。それに対しクザーヌスは、「包含」と「展開」の理論によって、運動を根源的一性としての神の展開、つまり「静止の展開」として捉えることで、神と被造物との関係性を非スコラ学的視点から説明する。さらにクザーヌスはその視点を、個と普遍の問題をめぐる彼独自の視点である「縮限」(contractio）の理論によって補強することで、汎神論の嫌疑を振り払おうとする。つまりクザーヌスは、神を万物の絶対的何性として、また「世界」(universum）を縮限された何性として理解するのである。

以上のように、神と世界の関係を「縮限」を媒介として捉えるクザーヌスの思想においては、事物の認識の問題が神の認識の問題に通底する一方で、その認識は神のみならず、事物の真理・何性にまでも到達し得ないという帰結をもたらされる。こうした視点は、認識の本質を「推測」(coniectura）として見る彼のその後の思想に繋がるものである。つまりそれは、「定義し得るもの」に基づくスコラ学的な思考法から一線を画し、「定義し得ないもの」への眼差しを新たに切り開くことになったと言えよう。

第 234 回研究報告会（1 月 31 日）

堀内みどり

標記研究会において、「International Conference “Mysticism without Bounds” に参加して」と題して発題した。

前号で紹介した “Mysticism without Bounds”（インド、バンガロール市クライスト大学）で発表されたいくつかの研究について、概略を紹介した。今回の大会では、キリスト教、イスラム教からの発言が多く、また、地域的にはアフリカからの参加者およびアフリカの習俗や慣習についての研究も目についた。こうした分野における質疑応答は、研究対象そのものについての質問が主となったが、そうした習俗や慣習、あるいは儀礼が意図しようとしていること、また、そのような行為の背景にある “ 理屈 ” を巡る意見もあった。エジプトのイスラム教を紹介した発表では、その宗団の高位宗教指導者と関わることができたことによって、かなり詳しいフィールドワークが可能となり、その結果、エジプトにおいても、いわゆるイスラム教神秘主義が継承されていて、彼らも回転舞踊を行うということだった。また、宗教指導者そのものを研究の対象とし、彼らに見られる共通の特徴とその他の分野におけるリーダーと比較するという発表もあった。「リーダー研究」の分野における新たな試みだということだった。

第 18 回宗教研究会「現代世界の “ 死 ” に見るいのちの危機と宗教の課題（1）」（2 月 12 日）

「現代世界の “ 死 ” に見るいのちの危機と宗教の課題」をテーマとする宗教研究会は、以下の趣旨をもって、今年度から 2 年間の予定で開催される。

現代の先進国社会では、生や若さが唯一価値あるもので、老いや病や死は否定すべきものと位置付けられている。とりわけ死は、私たちの生活のあらゆる場面において遠ざけられ、隠されてしまっている。そのため、「死を迎える」ことも「死を看取る」ことも「死を見送る」ことも忘れ、もはや身近な「死」から学ぶことができなくなってきている。現代、ことさらに「死の準備教育」や「死生学」の必要が説かれ、実践が行われているのも、死が遠ざけられているために私たちがあらためて死について学びなおさねばならないことを示しているのである。

その一方、貧困に苦しむ人々や紛争地域において死は日常的に現前する。国家間の南北格差が施療の機会や質に影響し、戦争やテロが死を正当化することさえある。グローバル化した世界では、格差は人の死にもおよび、時として、文化や宗教がその背景として横たわっている。南の世界の死が北の世界の人々の生のあり方に基因していないと誰がいえるのだろうか。

死はどの人にもやがて訪れる。自然死もあれば、突然の事故死や殺人のような不条理な死もある。さらには年間 3 万人を超える自殺、3 万 2 千人にものぼる孤独死。さらに宗教者の殉教に見られる大義ある死…。いずれにせよ、死は残された者の生を揺るがし、その人生に多大な影響を与えていく。体験としての死は、1 人称の問題にせよ 2 人称の問題にせよ、個々人の実存的な究極の課題でもある。

宗教は人間究極の課題である死をどう見つめ、どう受け止めてきたのか。どの宗教も、死を単に生物学的あるいは社会学的に捉えるだけにとどまらず、生死一如と呼ばれる境地について語ってきた。いわゆる生死を超えつつ、両者を包括するような宗教的言説は、しばしば「いのち」という言葉で言い表わされる。この研究会でも、「いのち」を単なる生死を超えた宗教的上位概念として用いたい。死の事実が事実として「いのち」を揺るがしている現代という時代、特に現実にある諸々の死を知り、「生死」に関わってきた／関わる宗教の姿を学び、「いのち」に貢献する議論の展開を期待する。

第 1 回では、打本未来（みくる）氏を迎えて、日本における終末期ケアあるいは緩和ケアを取り上げた。題目は「死生観：病院チャプレンの臨床から」。打本氏は、愛染橋病院の常勤チャプレンであると同時に、上智大学グリーフケア研究所（尼崎）、龍谷大学(京都)などの教育の場において教鞭を取られている。発表は、高齢者の家で死にたいという願いや在宅介護が推進されているにもかかわらず、日本では病院死が主流であり、死亡場所の希望は現実とはかけ離れているという話から始まった。終末期ケア・医療は死に直面したがん患者の痛みや苦しみに向き合うことから始まったが、その痛みや苦しみは実はすべての人が抱えているものである。看護師、医師、ソーシャルワーカーであったシシリー・ソンダースは、末期患者は身体的、精神的、社会的、スピリチュアルな苦しみをもち、これらが相互間関連的な痛みとなる「全人的苦しみ」の中にあることを指摘し、イギリスにおけるスピリチュアルケアの創始者となった。WHO の新しい健康の定義（案）にも、完全な肉体的、精神的、スピリチュアルおよび社会福祉の動的状態と記されている。これらを踏まえ、スピリチュアルケアの必要について、その範囲およびスピリチュアルの意味、ソンダースの定義、その実際について、先行研究の成果と臨床、特に周産期ケアの事例などを取り上げて、丁寧に説明された。また、スピリチュアルケアの担い手として宗教者が期待されていないこと、医療現場と宗教者との微妙な関係、宗教ケアとの相違と共通点などについて話された。

（堀内記）

（4 頁からの続き）

九江、漢口、揚州、蘇州など）以外について、その地名をカッコ内に記した。

（6）これまでの上海伝道関連資料の中で述べたように、戦後奥地から上海へ引き上げてきた天理教医療班大和医院の医師看護師職員らは上海の学校の校舎において施療活動などを行った。そして、その住所はここにある忠信第 2 小学校の住所と同じ上海嘉興路 40 号である。尚、忠信日語専修学校と恵民施診給薬所もこの住所になっている。

（7）このカッコ内の数字は収容定員数ではなかろうか。

（8）興亜寮には職員として「主事 1、講師 4」が記されているが、収容者は「○○名（日）」としか書かれていない。開設されたばかりで、まだ入寮者数が定かではなかったのであろうか。

TENRI SPORTS

天理スポーツ　シンポジウム 2011

未来を創る！
天理　障害者スポーツ

日時：平成 23 年 3 月 12 日（土）　13 時～ 15 時
場所：天理大学研究棟 3 階　第 1 会議室

【基調講演】

障害者スポーツ総論　**矢部 京之助**（名古屋大学名誉教授、日本障害者スポーツ協会科学委員会顧問、元科学委員長）

【パネルディスカッション】

○競技者の立場から：　**藤本　聡**（柔道　アトランタ、シドニー、アテネパラリンピック金メダル、北京パラリンピック銀メダル獲得）

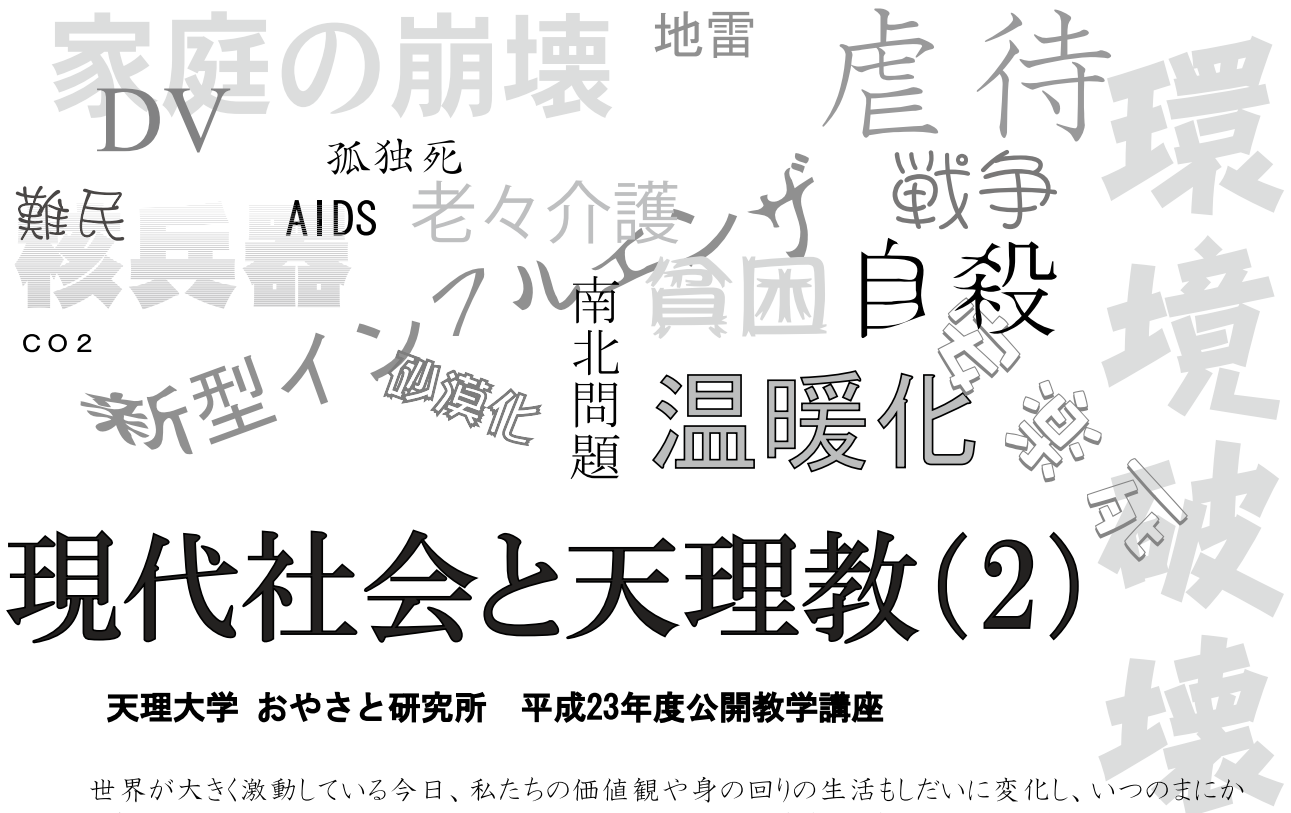
○指導者の立場から：　**橋本　和典**（日本身体障害者アーチェリー連盟　副理事長、障害者スポーツ指導者協議会近畿ブロック長）

○社会福祉研究者の立場から：
八木　三郎（天理大学おやさと研究所講師）

○障害者スポーツ研究者の立場から：
矢部　京之助（名古屋大学名誉教授、日本障害者スポーツ協会科学委員会顧問、元科学委員長）

○司会：　**難波　真理**（天理大学おやさと研究所　天理スポーツ・オリンピック研究室）

主催　天理大学　　後援　奈良県障害者スポーツ指導者協議会
企画　天理大学 おやさと研究所



現代社会と天理教(2)

天理大学 おやさと研究所　平成23年度公開教学講座

世界が大きく激動している今日、私たちの価値観や身の回りの生活もしだいに変化し、いつのまにか多様な価値観が生まれてきました。しかしその価値観は、ややもすると利己的な価値観となって、「我さえ良くば、今さえ良くば」の風潮を拡大・助長する危険性をもはらんでいます。そのような現代社会の中で、私たちが日々考え行動する拠り所は、常に天理教の教えに基づくことは言うまでもありません。

この講座では、「現代社会と天理教」というテーマのもと、2年間にわたって天理教の教えに基づく生き方、行動のあり方を、現代社会における具体的事例の中から考え、今年度は後半として下記テーマに基づいて講座を開講します。

第1講　4月25日(月)
佐藤浩司　自死 ―死ぬなよ

自ら死を選び、実行する人が後を絶ちません。我が国では、若年層から高齢者まで年々増加の一途を辿っています。官民あげてこの問題に対しての良策を探っています。自死を思い止めることができるのは何でしょうか。与えられた生をそのまま全うするために。

第2講　5月25日(水)
森　洋明　つなぎ―デジタル化社会のアナログ思考

さまざまな分野におけるデジタル化の波は、日常生活の中で私たちの物の見方や考え方にも大きく影響しているのではないでしょうか。そこで、アナログ的な姿勢としての「つなぎ」のあり方を見直し、その重要性を再確認したいと思います。

第3講　6月25日(土)
辻井正和　古い道と新しい道の間

1980年前後から日本の社会や人々の意識は大きく変わりました。しかし、「古き道があるから新しい道がある」と言われるため、新しい展開にはいつも疑問が呈されてきました。「古い道」と「新しい道」の関係をどう理解するのか、おさしづに基づいて検討してみたいと思います。

第4講　7月25日(月)
佐藤孝則　教えに基づく環境保護活動の実践例

環境問題は多岐にわたる学際的課題であり、その因果関係は複雑です。まして、価値観が多様化する今日では、解決策を見出すのは容易ではありません。しかし、教えに基づく生き方はそれほど複雑ではないと考えます。実践例を通して考えたいと思います。

第5講　8月25日(木)
深川治道　選択と不選択―教えとともに生きる道

今日、様々な人々によって生成された多様な情報が提供され、多様な選択肢が我々に提示されています。このような状況において、身近な事例から我々自身のあり方の選択について考えたいと思います。

第6講　9月25日(日)
野口　茂　世界の難渋に心を寄せて
―いま求められる共感の力―

貧困や自然災害、紛争など世界の難渋に心を寄せて、ひとの難渋を我が事として地道に支援活動を続ける人々が多くいます。彼らの心に通底する共感の力に着目して、たすけあいの意味を改めて考えてみたいと思います。

第7講　10月25日(火)
井上昭洋　おぢばがえりの巡礼論

宗教の聖地を尋ねる旅を巡礼と呼ぶならば、おぢばがえりも巡礼と言えます。おぢばがえりを巡礼と捉えると何が見えて来るのでしょうか。おぢばがえりの歴史を振り返り、現代社会における巡礼の意味、私達にとってのおぢばがえりの意義を再考したいと思います。

第8講　11月25日(金)
金子　昭　“無縁社会”への処方箋
―「たすけ合い」社会再構築に向けて―

年間の自殺者3万人、孤独死3万2千人。家族のきずな、社会の結びつきが解体しつつある今日、今こそ天理教者が内なる世直しの波を巻き起こし、互いがともにたすけ合う世の中へと建て替えていく旬が来ました。NPO・NGOを活用するなど、新しい社会だすけの処方箋を皆様と共に考えてまいりたいと思います。

第9講　12月25日(日)
深谷忠一　かんろだい世界への道
―目ざすものとその道程―

新幹線で東京に行って、大阪に着いたと思って訪ねる先を探しても、ぜったいに見つかることはありません。また、大阪に着いても東京の地図を使っていては、目的地を見つけることはできないでしょう。私たちの目ざす「かんろだい世界」はどういうところなのか、そこに至る正しい道路マップはどういうものかを考えてみたいと思います。

場所：天理教道友社６階ホール
時間：13：00～14：45　　＊お車での来場はご遠慮下さい。

第７回伝道フォーラム

「ネパールの天理教」

入場無料・来聴歓迎

天理教のネパール伝道は、1960年中山正善二代真柱のネパール巡教が端緒とされている。ネパールは、宗教的には包容力のあるヒンドゥー教および仏教が渾然一体となっている文化背景を持つ一方、世界の最貧国の一つとしても知られている。それゆえ、天理教の教えを聞いてはくれるけれども、その理解の実際は捉えにくいともいえる。経済的な理由から、「日本」人と親しくするということも考えられる。社会的政治的にも、長い鎖国政策やインドと中国とに挟まれた地理的要因から、両国の影響力は甚大である。ヒマラヤ山脈は、ネパールを陸の孤島にする要因ともなって、２大国への依存度は非常に高い。

こうした背景を持つ国での布教は、①多神教世界への布教、②経済格差のある地域への布教、③多民族／多言語国家での布教、④国教（現在は規定なし）との関係、⑤カーストへの対応など、いくつもの視点が必要となる。

今回は、そのネパールで初代の連絡所長を務め、長くネパール布教に携わってこられた大向良治氏をメインの講師に迎えて、ネパールでの布教伝道の特徴などについて語っていただく。また、現在、天理大学に学ぶ２人の学生に自らの天理教体験を話してもらい、ネパールをより理解したいと考える。

講演者

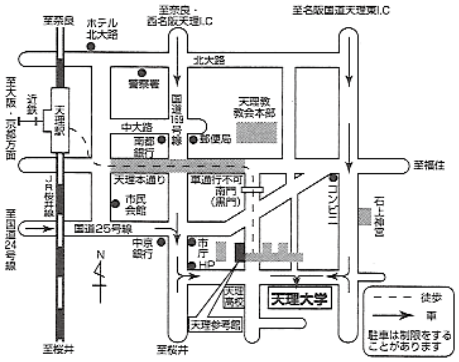
＜題目は仮題＞

大向　良治（天理教ネパール連絡所初代所長）
「ネパール連絡所の始まり」

成田　道広（天理教海外部翻訳課）
「天理教ネパール布教の現況概観」

ビボール・バルマ（天理大学国際学部１年）
「親からの信仰」

ラジェンドラ・タパ（天理大学国際学部２年）
「入信の動機と天理大学」



日時：平成23年3月25日（金）
午後1時から

場所：天理大学研究棟３階第１会議室

問い合わせ先：
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050
天理大学 おやさと研究所
FAX 0743-63-7255　E-Mail: oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

グローカル天理
第 12 巻　第３号　（通巻 135 号）
2011（平成 23）年３月１日発行

ⓒ Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者　深谷忠一
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒632-8510　奈良県天理市杣之内町 1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷　天理時報社
Printed in Japan